

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	俸給生活者及びその地位
Author(s)	松本, 惣一郎
Citation	龍南, 194: 1-16
Issue date	1925-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8804
Right	

俸給生活者及びその地位

松 本 惣 一 郎

は し が き

少しく新聞に注意する人なら、今年の三月十五日より神戸に於て、日本労働總同盟の大會が開催された位の事は、既に御承知の事と信するが、其の大會で「S、M、U、認容の件」と云ふ議題が可決されたる事に注目された人は或は少數であつたであらう。S、M、U、とはSalary men's union即ち俸給生活者の組合(又は同盟)を指すのである。

俸給生活者とは、官吏、會社員、小學校教員、巡査等の總稱である。

是等の人達は、少くとも我々の常識に従へば「國民の中堅」であり、「紳士」であり「堅實なる思想を有する人達」でなければならぬ。その俸給生活者の一部と、労働階級の一部とが提携した事、否提携せざるを得なかつた事、及びこの提携が労働階級に「認容」された事、即ち労働階級の方に俸給生活者の方から「何卒宜しく」と云ふ形式であつた事は、何れにしても、榮葉服の代りに、所謂「洋服」を着て居る事に依り、賃銀の代りに俸給を受取る事に依り、その労働階級の上に位すると信じ、乃至は自惚れて居た、俸給生活者又はその卵たる學生の「品位」を多少は傷けたかも知れない。

併し僕をして云はしむれば、事の由來する所が現はれただけの事である。

この機會に當り、少しく俸給生活者並びに中間階級の地位、その運動に就いて論じ、或は紹介するは、無益でない事と信する。

(一)

「凡て在來社會の歴史は階級闘争の歴史である」とはマルクスの云つた所である。成程是で、階級闘争の社會進化上に占める重要性は了解が出来る。併し次に問題となるのは、階級とは何ぞやの問題である。暫くブハリンの言を借用すれば、生産に於て、同じ役割をなす者の全体である。然らば現代社會には如何なる階級が存在するであらうか？是に就いても、ブハリンは次の如く、分類して居る。

- (1) 現代の社會形態にて基礎となる階級
- (2) 中間階級
- (3) 過渡的階級
- (4) 階級の混合形態
- (5) 階級落伍者

(4)(5)は本論と關係がないから省くと、問題になるのは、(1)(2)(3)である。

(1)は有産階級と無産階級である。この關係が近頃喧しい資本主義社會の階級闘争となつて居るのである。(2)はこの二階級の中間に位する、技術頭腦労働者即ち俸給生活者である。(3)は小農の如き有産階級無産階級の何れかに將來は屬すべきものを云ふのである。

さて我々の常識に従へば、中間階級の名の下に、(2)(3)を引つくるめて居たが、何故ブハリンは是を分析したであらうか

？何故金持と貧乏人の間にある、中流の生活をして居る集團を一階級としなかつたか？以下少しくこの事を論じなければならぬ。

ブハリンの意味の中間階級を又二つに分類する。

Ⅱ、俸給生活者。

Ⅲ、自由職業家（藝術家、著述家、辯護士、醫者等）

俸給生活者の社會的地位、換言すれば、社會的生産の過程中に於ける小齒車としての地位性質等はどんなものであらうか。この問題は、基礎階級と、俸給生活者との關係を求める事に外ならぬ。現代の基礎階級は、有産階級と無産階級であつて、前者による後者の被搾取、前者に依る後者の被壓迫が、その社會形態である。

さて俸給生活者は生産に關係して居るが、彼等は形態上何れの陣地につくものであらうか？

俸給生活者は其の名の示す如く俸給に依り生活するものである。「勞働」するのではなくて「事務」を取るのである。即ち勞働を組織する者である。蓋し勞働を組織するとは、職工の監督をしたり、商品又は原料の需給關係に、氣を附けて、資本家に最大の利潤を得させる事である。（勿論これは現代社會に可能な範圍に於てである）換言すれば、勞働者を働かせて利潤を得る點からは資本家と同じ働きをなす。故に、俸給生活者は、現代社會に於ては、資本家に利潤を得させる點に於ては、その限り勞働階級の敵である。併し乍ら、私は是を以て、俸給生活者は勞働階級に取つては不要なものであると云ふのではない。生産の上では重要な役割をなして居るのである。勞働階級の敵となるのは、現在の社會關係に於てであつて、世がひっくり返つたら又別問題である。

然らば俸給生活者は無産階級と相通する所がないのかと云ふとさうでもない。それには利潤の問題から考へて見なければ

ばならぬ。從來の經濟學者中には、利潤を企業の危險、生産管理に對する報酬であると云ふ者があつた。併しながら、生産の管理者としての、生産の組織者としての俸給生活者は、利潤の處分に關して、容喙する様な事は許されて居ないのである。彼等はただ、利潤を作り出す器械として働いて居るのである。故に、この點に於ては——單に資本家に利潤を作り出すと云ふ點に於ては——彼等は資本家に對して無産階級と同じ立場にあるものと云はねばならぬ。更に俸給生活者は、頭腦労働者又は精神労働者と云はれて居る。即ち是は明かに俸給生活者が、近代工業の發展に依り生じた、驚くべき複雑なる分業に於て、頭腦的技術的方面を行ふ労働者なりと云ふ事を認めたものであつて、彼等も亦無産階級戦線の一部を形成せるを認めたものであると云ふ事が出来るのである。私は今迄不知不識、單に俸給生活者の一部たる、會社工場の事務員の如きもののみについて論じて居たが、官吏が、行政司法等に於てなす所は、會社員が經濟界になすが如き仕事をそれその方面に於てなすものと云つて差支へないだらうと思ふ。

、以上を要約して我々は俸給生活者の地位を次の如く述べる事が出来る。

一、俸給生活者は、技術的要素として無産階級の上位にあるものである。

二、俸給生活者は、資本主義社會に於ては、政治的に、或は經濟的に、有産階級に最大の可能的利潤を擧げしめるため、無産階級に對して、經濟的、政治的に、搾取者壓迫者として、現はれる。

三、俸給生活者は、一般無産階級と同じく、政治的にも、經濟的にも有産階級に搾取されて居る。

一は技術的條件であるから、苟も人間が社會的に生産をなす以上この性質は變らない。二、三、は資本主義社會に於ては必然的に生ずる性質で、資本主義社會の續く限り、消滅しないものである。換言すれば、我々是如何に無産階級に同情して居るとか、無産階級と同じであるとか云つても、そんな心持に、考へて成らうとしても、會社員又は官吏である以上

是等の性質、就中一、の性質は存するのである。

※

※

※

次に自由職業者、即ち辯護士、醫師、藝術家等の地位が問題となつて来る。是等の人達は、其の「自由と獨立」を保つて居る相である。併し乍ら現代に於ける、自由職業者の生活振りを見る時、我々は殆んどその自由と獨立を認める事が出来ないのだ。

成程、昔は彼等は「獨立」を保つて居たかも知れない。「自由」の空氣を吸ふて居たかも知れない。併し彼等が近頃、俸給生活者に化する懐じさはどうだ。

彼等は資本主義が進むにつれて、諸種の企業に織り込まれざるを得ないのである。資本主義は、小さい、自由職業者の自由を——たとへ彼等がその夢の様な「自由」に、どれだけあこがれを持つて居ても許さないものである。大病院所屬の議員、會社のお抱へ辯護士、著述家の新聞雜誌記者化、劇場つきの畫家等——實際、天下の文豪、ブル文學の首領として、自らも他も許して居る、菊池寛氏ですら、大阪毎日に云はすれば、「本社員菊池寛」である。

天下の文豪にして然り、況んや三文二文一文所の文士に於ておや。殆んど、俸給生活者と見做して差支へないのである。その昔、天外より來れる精妙なるインスピレーションは藝術家をして感激せしめた物である。併し現代に於ては如何？インスピレーションは、繪畫商人、美術業者、大出版業者の註文の形でやつて來る。この註文がなければ、天下の大藝術家は「自由」に、ミイラとなるより外に仕様がなない。故に我々は、彼等の俸給生活者化を見越して、是を特別に論ずる事は止める。

それで、ブハリンの中間階級に關する考察は、打ち切つて、次にブハリンの意味に於ける、過渡的階級に屬するものに

進んで行きたい。

過渡的階級に、屬するものは、手工業者、農民（自作農）の如きものを指す。彼等は封建時代の遺子であつて、ブルジョア階級をも、プロレタリア階級をも生ずる社會群である。即ち資本主義社會に於ては、當然分化すべきものである。併し乍ら、それが決して分化して居ると云ふのではない。日本には、未だ自作農、小賣商人、手工業者等は随分多いのである。自作農、小賣商人、手工業者等は小さいながらも、獨立せる經濟主体であつて、俸給生活者の如く經濟的に他に從屬して居る群とは、性質を異にするのである。そしてこの過渡的階級と稱さるものは、その生活の資料を小さい乍らも、財産から得て居る者を指すのである。併し乍ら資本主義社會は、競争を以てその機構を進めて行く社會である。そして競争に於ては、資本の大なる事が、勝利の條件である以上、この小資本を擁する社會群は、全体として貧化せざるを得ないのである。其他この階級については、歴史の發展の内に論ずる事にする。

(一)

俸給生活者は、決して天より天下つたものでもなければ、地より湧き出でた者でもない。それは歴史的必然を遂ふて、發展して來たものである。されば、俸給生活者の發展の跡を見るためには現代社會の發展の跡を、たとひなければならぬ。中世手工業ギルドの時代——それは私有財産の花が満開した、自給自足經濟の時代であつた。

各人は各人のために是がそのモットーであつた。併し乍ら、歴史は絶間なく進展する。そして近世工業資本主義が現はれたのである。

資本主義の時代に入つてより、先づ都市と田舎の衝突が始まつた。

喜望峯迂廻の印度航路發見、新大陸の發見は、今迄小さかつた商品の需要を、急激に増加せしめた。併し、小規模の都

市手工業ギルドは、この大需要に應ずべく、餘りに小であつた。蒸氣機關並びに紡績機械の發明等は、勢ひ都市手工業ギルドの生産機構と衝突した。而して新たな工場資本はこの競争に於て勝利を得たのである。

封建領主に依り過度に搾取されて居た、農奴を工場に追ひ込み、訓練する事に依り。

保守的封建主義者——御領主様の土地を逃げだす農奴を惡み、將に亡びんとする古きイデオロギーに、センチメンタルな覆ひをかぶせて喜んで居る、新しい事なら何でも嫌ひな——と、新しき時代を代表する者との間に鬭争が始つたのは、無理もない。而して是が都市と農村の衝突なる形を取つて表はれたのである。而してこの衝突はマルクスの言を以てせば「ブルジョアジーはその商品の廉價を重砲として、凡ゆる物を支那の城壁をも破壊した。又それに依り、外人を頑固に憎惡する野蠻人をも降服させた」のである。

併し、資本主義は平面的に進展すると共に、其の範圍内にある、凡ゆる社會群を新しき配列に置かなければならない。彼等は古い權力者たる封建領主を、凡ゆる國民的郷土的非難にも拘らず、その椅子より投げ落したのである。併し乍ら、未だ小農及び手工業者を全部、プロレタリアに陥し入れる事は出来なかつたのである。

私有財産制度の下に於て、商品を生産する時競争は不可避である。然らば工場資本家と小手工業者との競争は、何れの勝に終つたか？資本家が勝利を得たのである。

かくして、資本主義時代には漸次亡んで行くのである。注意すべきはその心理である。彼等の心理は、全然封建時代の遺物である。すぎがあつたなら、何とかして、大資本家の地位に成り上らんとして居る。故に彼等は「成功談」と云ふ様なものを非常に喜ぶ。その將一寸した打撃にも、直ぐ腰を折られてしまふ——成功者らしく振舞ふ事が出来ず。彼等の財産觀念は又獨特の者であつて、苟くも自分のものと名のつくものには、生理的の執着を持つて居る。それを手離すのは身

を切られるよりつらいのである。

幾時代の間か、父祖と自身との生活して來た職業と環境との結果として、その土地にもその家屋にも強い愛着心があつて、是等のものと離れるのは、大富豪が巨萬の富と分れるのよりつらいのである。その財産の爲に損をしてもよいから、握りしめて居たいのである。不斷の心配の中にあり、その財産のために氣も狂ふばかりはたらくのである。

かかる社會群が、不斷の流動を續けて居る資本主義の世の中に處する事の出來ぬのは、判り切つた事である。過渡的階級は要するに、消滅の道を行く。人は土に還れ、田園に歸れと聲を枯らして叫ぶが、幸か不幸か、小農は倒れて行くのである。

然らば一方ブハリンの意味に於ける中間階級は如何。

俸給生活者は、既に(一)に論ぜる如く、生産を組織し、管理する社會群である。若し小さい職場に數人の職工を備つて仕事をさせるのであれば、一人の親方では等の事務を取る事が出來るのである。然るに工場資本主義は何百何千の勞働者を要するのに、どうしてそれを一人の手で組織し監督して行く事が出來様か。是に於て、知識階級としての俸給生活者は出現せざるを得ないのである、即ち現はるべくして現はれたのである。而して「一人の資本家は十人の資本家を殺す」所の競争は資本の聚積を進める、資本の聚積は、勢ひ工場の規模の擴張を促す、而して管理組織は個人的の小工場間の競争が終り、社會的分業の代りに技術的分業が現はれるに従ひ、益々その需要が生ずるのである。

又一方、近代の國家機關は、その絶大無邊の大通力を振ふために、遂には官吏の大群を要する事になつたのである。かくして吾人は知る、俸給生活者は資本主義と共に生れたものである。一方過渡的階級たる、小農及び手工業者は封建主義の遺物である。

この相違こそ、ブハリンが中間階級なる名の下に、十把一からげに、金持でも貧乏人でもない者が中間階級であると云ふが如き曖昧なる定義を下さなかつた點である。これが本論の始めに生じた疑問に對する答である。

さて資本主義初期に於て、俸給生活者は資本家とどんな關係にあつたであらうか。

俸給生活者の第一期に於ては、その搾取と壓伏の機能が、極めて明瞭に現れて居た時代である。この時代にあつては、俸給生活者に對する、階級支配の恩寵は並々ならず厚いもので、凡ゆる優遇が與へられたのである。支配階級は、妾が三毛描を愛する様に、俸給生活者を可愛がる。莫大な俸給を與へ、或は利益の配當に與らせ、立派な住宅に入れてやる。また専門學校や大學をドシ／＼建て、上手に勞動階級を管理する人間を造るのである。そこで俸給生活者はすっかりいい氣になつてしまつて自分も支配階級の一人である様に思ひ込んでしまふ、彼等は支配階級の様に歌を歌ひ、努めて、資本家らしく話し、或は笑ひ、自らを「卑しき」筋肉勞動者と混同されん事を恐れ「事務」と「筋肉勞動」との相違を、天地程の相違があると信じたのである。そして勞動者の前では胸を突き出して威嚴を示し、資本家の前ではバツタの様に腰を折つて居たのである。忘れてはならない、飼犬はどんなに大切にされても、首には鎖が附けてあるのだ。若し「飼犬が手を噛んだ」なら遠慮なくお拂ひ箱となるのである。

併し、それはともかく、この時代は俸給生活者に取つては黄金時代であつた。天下の人材は翕然として俸給生活者たらん事を願ふのである。

我國では明治の中頃迄、學生は官吏たらん事を勉めたが、後大工業が漸次發達するに及んでは、天下の學生は競ふて三井三菱の門に集つたのである。俸給生活者のこの特權的地位は、資本の支配の結果であるから、彼等はその永續を願ふ、勢ひ反動的だつたのである。

併し乍ら、資本主義は更に進展する。資本の集中は急速に、進展する。そして其は勢ひ夥だしく俸給生活者の數を増せしめる。一方所謂過渡的階級、即ち小農及び手工業者は、資本家の競争者としては、亡んでしまつた。注意しなければならぬ。我々は小農がなくなつたと云ふのではない。小農は或は以前よりその數に於て増加したかも知れない。小賣商人とても同様である。僕は(一)に於て過渡的階級としての小農、小賣商人等は亡んで行く事を云つた。然るに、此處に於て再び小農は大して減少しないと云ふ。明かに矛盾ではないかと云ふ人があるだらう。

併し乍ら、僕の意味は、獨立の生産者としての小賣商人、小農の事を(二)では云つたのであつて、それは確かに殆んど消滅したのである。

然らば、現在存する所の小農、小賣商人は獨立して居ないのか？然り、獨立をして居ないのが、多數である。

例を引いて云へば、次の如きものである。今或る工場で一千人の首をきるとするならば、決してこの一千人は全部失業者としてブラ／＼して居るのではない。彼等の背後にはパンの脅威がある。この脅威は到底、職業紹介所の二十や三十では治す事は出来ない。

職業があれば結構だが、ない場合だつたらどうするのだ？死んでしまふより外に仕様がなない。そこで何か小賣商人になつて口すぎをして行かうかと云ふのが、その大体の落着く所である。

併し勿論彼等には、大して資本がない。それで商品は前借りか、或は委託販賣のものをを用ひる様になつて来る。即ち誰か財産ある人に頼つて、それから融通を受けて生活して行くのであつて、獨立では是等の失業者は生活して行けないのである。そして又景氣がよくなれば、彼等は再び工場に通ふのである。かかる種類の小賣商人は、決して昔の競争者として

働いた小賣商人とは同じものではない。是等の小賣商人は、現代に於ては、直接に資本家階級の搾取對象物となつて居る是に於て、以前の小賣商人は亡んだと認めなければならぬ。勢ひ今日の小賣商人には、幸か不幸か、漸次自分と名の附くものを持たぬ。故に昔の小賣人とは違つた心理を持つのである。又小農にしても、自作農の殆んど、氣息奄々たるものに依りその一斑を察する事が出来ると信ずるのである。

以前は勞働階級と、小農階級との間に越す事の出来ぬ大なる溝渠が、其思想上、心理上に存じて居た。併しながら、現在に於ては、農村には既に私有財産を失つた集團が漸次プロレタリアと同一陣列にある事を自覺し始めた。そしてそれは既に日本の社會問題として、華々しい活躍が小作問題なる名の下に起つて來た。更に農村の中流階級が、殆んど表向きの看板にすぎぬ、彼等の財産に、疑問符號を投げつけて居る事も見逃せない。即ち無産階級と過渡的階級と見らるる者との間に、一種相通する所あるを示して居るのである。

然らば資本の集積と共に増大する俸給生活者の問題は如何？

資本主義社會は絶へずその機構を擴大しつゝ進展する生産形態である。擴大されたる生産は、愈々微細の點に亘れる分業を要求する。即ちその結果は、大學卒業者が、學生時代につめこんだ智識を充分に活躍させるには餘りに狭い機械的な仕事をコツ／＼やりながら、退職年金を考へねばならぬ様になつて來る。そして、無産階級との折衝、生産の管理、利潤の處分等は主として、重役が營む様になつて來るのである。かくの如く俸給生活者中には、多數の機械的事務員の集團と上層の監督者の集團に、先づ機能の相違が現れて來るのである。そしてこの多數の機械的事務員は勢ひ昔程支配階級からチャホヤされない様になるのである。

而して、一方専門學校は増加して來る、是に伴つて智的勞働者が漸次増加して來る。商品の供給が増加し、需要が是に

伴はない時は、その商品の價格が下落するのは商品の需要供給の法則である。勞働力が一個の商品である以上、この法則の外にある事は出来ない。是に於て、支配階級の恩寵は上にも厚くして、一般俸給生活者は漸次支配階級から白眼を以て迎へられる様になつて來たのである。

かかる際に、突發したのが歐洲大戰亂である。この大戰亂は日本の工業界に未層有の活氣を呈せしめたのである。それと共に、物價は天井知らずに騰貴して行く、而も一方俸給生活者はその生活費が一定されて居るのであるから、その苦しい事は並一通りではなかつたのである。物價は二倍三倍と上る、俸給の方に於ては、各種の手當がそれにつれて、出來たのであるが、常に物價騰貴の跡を追ふのでも、苦しい時がある筈だ。併しながらとに角、この時とても智的勞働者は、皆職業につく事が出來たのである。

併し乍ら戰爭は何時迄も續くものではない。やがて戰爭の止む時が來たのである。續いて一千九百二十年三月頃になつて、始めて「休戰」の聲を聞いた時以來、絶えず人々の胸中に、或る不安を抱かしめたものが起つて來たのである。恐慌が始つたのだ。

事業界は恐慌と共に整理期に入り、盛んに失業者を出し、且輸出振興の爲に生産費の節減——賃銀の低下が實行されるに至つたので、俸給生活者の生活は不安と窮乏のどん底に沈み始めたのである。暴騰せる物價と、低下せる賃銀の間の動きの取れない差額。失業の脅威。

好景氣再び來らんの聲は、大正十一年に入つても單に聲以上の何物をももたらせなかつた。下り坂になつた日本の資本主義が、産み出した物は、事業界の極度の緊縮、軍備縮少、官界の整理、それに伴ふ工場の閉鎖、大規模の解雇と冗員淘汰、物價下落の緩慢と、賃銀低下の急激であつた。而もその上失業は、遂に俸給生活者に取つても、動かすべからざる事

實となつて現れて來た。俸給生活者の無産階級化の明かなる徴候はかくして現はれたのである。

「大學の卒業證書などは、全く一個の不渡手紙にすぎない。全くどう處分していいか分らぬのは知識階級の失業者である。」とは皆て東京市の職業紹介所長が讀賣新聞紙上に公言せる所である。我々が大學を出てから、「全たどう處分していいかわからない」様な事は、今後も續くものと見なければならぬ。家が裕福だつたら宜い。御令息の少々の失業位は何でもない事かも知れない。

併し乍ら、我々の全部が裕福な家庭のものだと云へない。内狀を少しく調べて見るならば、景氣の宜い時代に學校に入れて見たが、中學では半端である。「大學までは何とかして」と、山を賣り田を賣り、血の出る様な思ひをして、息子に修學させて居る父兄もあるだらう。是等の父兄は、大學卒業證書を以つて、金の出て來る打手の小槌の様に思つて、それに資本を注ぎ込む様な氣の人であらう。

「馬鹿らしい、我々は學士を得る爲に、學校に出て居るのではない。」と憤慨する人があるかも知れない。併し父兄に取つてはそんな呑氣な事を云つて居られないのだ、大學を出たらすぐ働いて貰ひたいのだ。私は父兄の願の切なるを見る、併しながら、手形は「不渡」なのだ。要するに、暗膽たる日本事業界の現状は殆んど、永久に續くのではないかとさへも私には思はれるのである。――

(四)

私は(一)に於て、俸給生活者は又頭腦勞働者である事に於ては無産階級なる事を述べたが、是に至つては、生活上に於ては殆んど無産者と擇ぶ所のない迄に低下したのである。故に、俸給生活者が、一般無産階級運動と交渉を持たざるを得ない事は明かである。

日本に於て、労働組合運動は既に歐洲戰亂中より徐々に芽を吹き始めた。労働組合は生産者としての生活權の保證を團結に依りて得んとする所の運動である。

そして労働者が組合に依り、徐々に生活條件の低下を妨ぐ運動を始めた時、既に労働者と同じ程度に生活條件を低下せられた、俸給生活者はこの運動に注目せざるを得ない。遂に俸給生活者にも組合が起つて來たのである。

既に、ドイツに於ては一八八〇年代より、會社員、官吏、教員が團結を始めたのである。

勿論始めは雜誌を發行したり、上官に請願又は決議を提出する位が關の山であつたのだ。即ちごくお上品な保守的な、組合と云ふよりも社交俱樂部と云ふ方が適當な位なものであつた。そして、それを以て「下品な」労働者等とは選を異にして居ると思つて居るのである。併しこんな「上品な」フロックコートをつけた様な運動が何時迄も續く筈はない。生活は段々苦しくなる。決議をしたり、請願を繰返したりして居る事が、何の効果もない事が判つて來る。そして、自分等も労働者だと云ふ自覺を、資本主義制度の重壓が彼等に知らしめる。お上品な手段の代りに下品な方法が選ばれる様になつて來たのである。そして彼等もストライキ、サボタージュを行ふ様になつて來た。更に歐洲戰亂は、遂に俸給生活者團體を以て公然と労働組合なりと宣言せしめるに及び、一九二〇年には「獨逸官吏總同盟」「獨逸自由被使用人同盟」は「獨逸労働總同盟」と三角同盟を結び活躍して居る。

ジービエフの言に依れば「多くの國々に於て智識階級はその經濟的條件よりして、現在の社會狀態の下に於て、生活の低下を強要されて居る。世界の各國——獨逸、日本、ブルガリヤ、フランス等にあつては、智識階級の大部は壓迫されて居る。そして労働者に同情を持たざるを得ない様になつて居る。」と。

日本は未だ比喩物にならぬ程、運動は遅れて居る。併し乍ら、其の萌芽は既に見られ得るのである。

例へば大正八年東京市のある小學校に於ては、三十名ばかりの教員が「日本飯の會」を組織して、毎日晝飯だけは外國米の代りに、日本米を一合二勺、それに澤庵四切？宛つけて、學校で會食する申し合せをした事があつたが、近年になつて小學校教員の運動は益々進まんとして居る。

勿論、この種の運動は上品な運動であるが、將來に於ては勞働組合運動と同一歩調を取る事は、豫想するに難くない事であらう。

この形勢にあつて、大正十三年二月の日本勞働總同盟の大會に於て「S・M・U」認容の問題が起つたのであるが、併しその時はまだ時期尚早等のために否決されたのである。

併し乍ら其後時世は益々、勞働階級と俸給生活者提携の方向に進みつつあつたのである。

最近に至つて、更にこの形勢に對して注目すべき一事件が起つたのである。

昨大正十三年七月廿五日より、東京にある日本電機に於ては、職工と社員の合同せるストライキが起つたのである。是が日本に於ける、智識階級勞働階級が共同戦を布いた最初の勞働爭議であつた。この爭議は、社員及び勞働者側の敗北に局を結んだのであるが、ストライキは五十四日間と云ふ殆んど二個月に近い間續いたのであつた。これは、下級社員が既に勞働であるとの自覺に達せる事、この二つの團結が如何に強いものであるかと云ふ事、等を示すものとも見られる。

特に注目すべきは、社員の出した聲明書である。

その内に散在せる次の文字は如何に頭腦勞働者が窮迫せるかを示して餘りあるものである。

「財界好況の時であれば、我々は内職其他等かの方法で、餘分の収入を見附ける事は比較的容易です。けれども今日ほ之を求むる事は出来ません。又父兄から補助を受ける事も不景氣の今日では甚だ困難であります。

「吾々の仲間には、それがため「職工にさせて呉れ」と會社に個人的に歎願したものとさへ随分あります。

是等の形勢の内に開かれた労働總同盟の十四年の大會に於て、「S・M・U・認容の件」が可決されたのは、日本に於ける、
俸給生活者、知識階級の運動に新紀元を開いたものと云はねばならぬ。」

※

※

※

附記 「※」は作者の了解を得たる學校當局よりの抹殺を示す。